

## ダルヴェルジン＝テペの調査

林 俊 雄

中央アジアを流れる最大の川アム＝ダリアの中流域は、古来バクトリアあるいはトハリスタンと呼ばれ、東西文明の十字路として栄えてきた。とりわけ北からアム＝ダリアに注ぐスルハン＝ダリアの流域はクシャン時代の遺跡が集中していることで知られている。この地域は現在ほとんどがウズベキスタン共和国スルハンダリア州に属するが、同州には古代から中世にかけての都城址・集落址が200以上確認されているが、その中でも最大級の遺跡がダルヴェルジン＝テペである。

ダルヴェルジンとはモンゴル語で「四角形」を意味し、テペはペルシア語で「遺丘」を意味する。その名の通り、この遺跡は長方形の城壁で囲まれている。面積は 36 ha 以上あり、城壁は総延長約 2.5 km、その厚さは 10 m に達する。

遺跡の調査は、ウズベキスタン・ハムザ記念芸術学研究所の調査団によって始められた。まず1960年に遺跡全体の地形測量が行われ、城壁内の墓がかたづけられた。1961－63年に予備調査が行われ、1967年には常設の調査基地が設けられて、それ以来ほぼ毎年調査が行われるようになった。そして1974年までの発掘成果は、1978年に報告書と図録（フランス語版）となって発表されたが、それ以降の調査は断片的にしか発表されていない。創価大学は奈良県立橿原考古学研究所の協力を仰いで1989、91、93年にそれぞれ1ヶ月弱、上記研究所とともに共同調査を行い、現在発掘報告書を作成準備中である。以下にまず1978年発行の報告書に基づいて調査成果を概括し、ついでそれ以降の調査を共同調査の成果も含めてまとめた。

ダルヴェルジン＝テペは、バイスタウ Baisuntau とババタグ Babatag 両山脈にはさまれた肥沃なスルハンダリア河谷の最も広がったあたりに位置している。この地域では灌漑農耕は早くも前2000年紀から始ま

り、前1000年紀前半か中ごろには防衛施設を備えた都市型の文明が形成されていた。前6－4世紀にはアケメネス朝ペルシアの領域に入り、アレクサンドロス大王の遠征（前323年）以降は一時セレウコス朝に属したが、前3世紀中ごろからグレコ＝バクトリア王国が独立した。前2世紀後半には北方から大月氏が侵入し、後1世紀には大月氏の五翕侯の一つの貴霜（クシャン）が覇権に握り、勢力をアフガニスタンからインド西北部にまで広げた。しかし3世紀になるとササン朝ペルシアに占領され、3－4世紀にはいわゆるクシャノ＝ササン朝と呼ばれる従属国家となった。4世紀後半から5世紀にはキダーラやエフタルなどの遊牧民が侵入し、それまでの社会制度は一変することになる。このようなバクトリアの古代都市文化を明らかにするうえで、最も理想的な遺跡がダルヴェルジン＝テペである。

遺跡は南部のほぼ円形の内城部分（直径 170－200 m）と長方形の都市部分（650×500 m）とからなる。都市を囲む城壁には 30－40 m おきに望楼があった。文化層は内城では 6－7 m、都市では 5－6 m に達する。内城は自然丘の上に造営され、その東北部にはイスラム教徒の墓地と聖者廟（マザール）があった。

考古学資料に基づいて以下の層位が確認された：

- 1) グレコ＝バクトリア時代の層（前3－2世紀）
- 2) 月氏＝クシャンまたは初期クシャン時代の層（前1－後1世紀）
- 3) 大クシャン時代の層（1世紀後半－2世紀）
- 4) 後期クシャンまたはクシャノ＝ササン時代の層（3－4世紀）
- 5) エフタル時代の層（5世紀）
- 6) チャガニアン＝フダート時代の層（6－7世紀）

第1期にはのちの内城部分を中心に面積 3 ha 以内

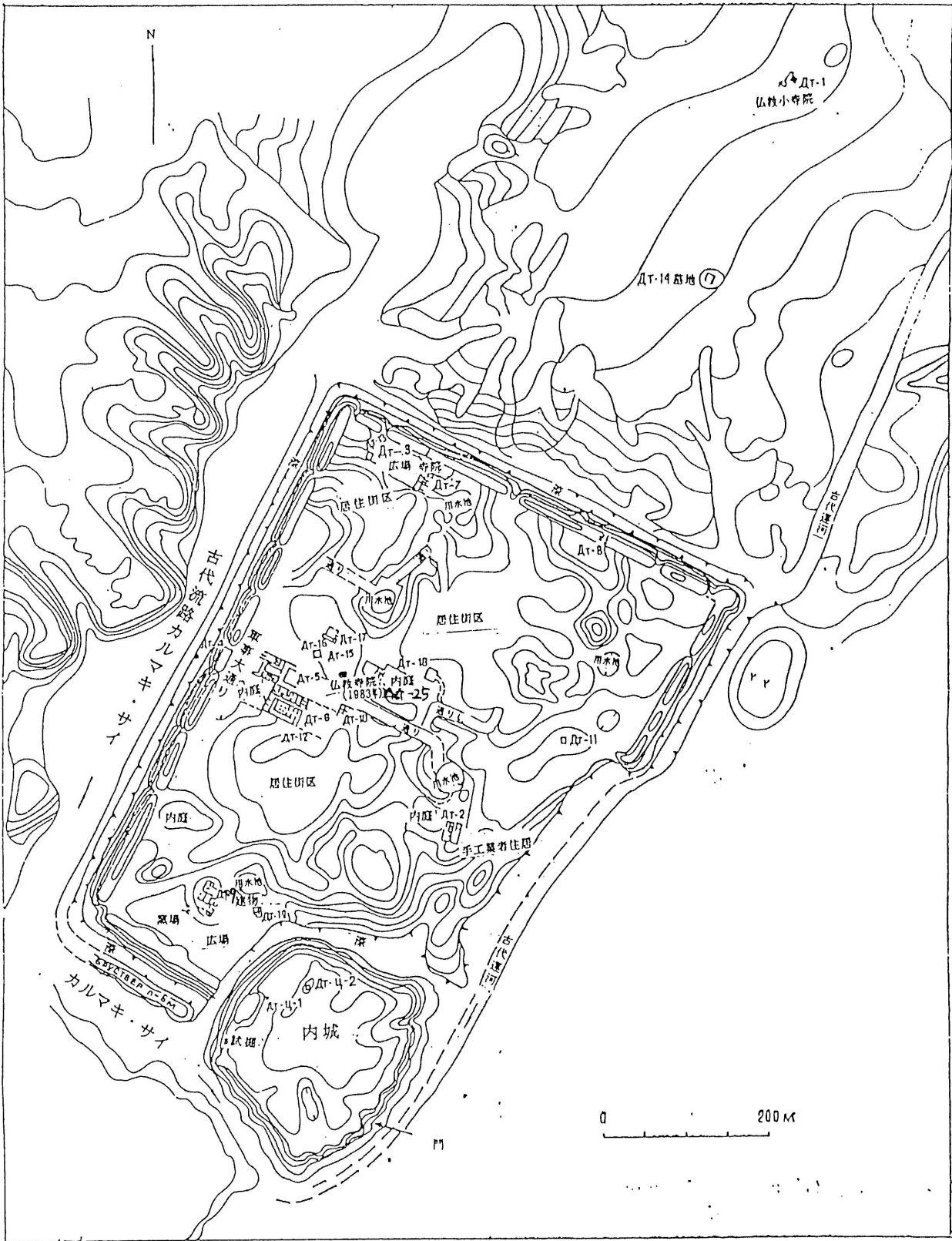


図1 ダルヴェルジン＝テベ都城址の平面図, E.B. ルトヴェラーゼによる (1978年)

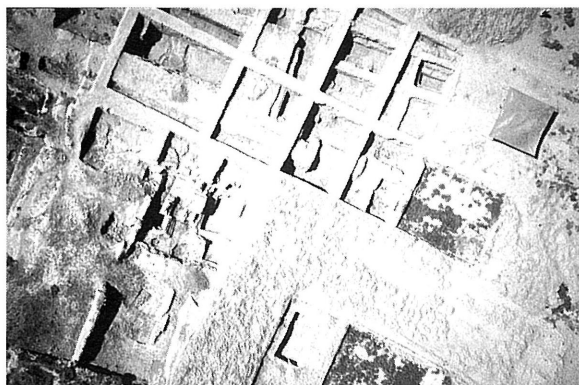


写真1 ダルヴェルジン＝テベ第25区（上方が1989, 91年発掘）（鳳写真）

の狭いところにパフサ（泥壁）造りの居住地点が形成され、それがやがて城壁で囲まれるようになり、そこから徐々に北へ広がっていった。Dt-7 区の基底部の半地下式住居で、グレコ＝バクトリアのエウティデモスの貨幣が発見されている。

第2期には 650×500 m の城壁（厚さ 4.5–4.7 m）が造られ、まわりに濠が掘られた。まず最初に都市の南部と中央部が建設され、陶器職人の区画も形成されはじめる（Dt-9）。Dt-2, 6, 9 区ではヘリオクレスの模造貨が出土している。城外の北側にはナウス型穹窿墓が造営された（Dt-14）。ダルヴェルジンから 30 km 離れたハルチャャンではクシャン朝時代の宮殿が発見されているが、プガチェンコヴァはこれを夏の離宮、ダルヴェルジンをそれに対する実質的な首都とみなし、『魏書』『西域伝』に見られる貴霜翕侯の都「護渚城」に比定している。

第3期には内城部分が明確に城砦となった。城壁は厚さ 3.9 m, 基底部では 5 m に達した。都市部分でも城壁が厚くされ、9–10 m に達した。都市の貴族の住居は部屋数が多くなり（Dt-5 区では20室、Dt-6 区では26室）、木彫や壁画で飾られていた。手工業も発達し、Dt-9 の陶工の区画には多数の窯が現れた。都市北部の荒れ地が急速に開発され、Dt-7 区にカドフィセス1世、2世時代に小神殿が建造された。東北部の Dt-11 区では多くの大甕が設置された部屋が発見されたが、この大甕に貯蔵されていたワインは家庭消費用ではなく販売用であつたらしい。城外北方の Dt-1 区では仏教寺院址が発掘され、彩色ストウッコの仏像・

供養者像が発見された。この時期の末には都市の衰退が始まり、陶工の区画では窯と作業場の大半が放棄され、Dt-1 区の仏教寺院は破壊されたと報告書は記しているが、第4期に活動の重点があつたとする見方もある。

第4期には都市は次第に衰退し、城壁は破壊され崩れていった。陶工の区画も活動を停止した。第5期には都市としての機能が最終的に停止し、内城の廃墟の上には、侵入してきた遊牧民の本営が置かれていたようである。北壁の壁そのものの中に墓室が造られ、その一つからペーローズ貨を模した5世紀のエフタルの銀貨が出土している。

1983年以降は都市中央部の Dt-25 区の仏教寺院址を中心とする部分が発掘されている。ここでは螺髪を付けた仏頭が出土した。この寺院をプガチェンコヴァらは出土貨幣から2–4世紀としているが、螺髪の出現を4世紀とみる小山は寺院の活動の中心を4–5世紀とする。1989, 91年には寺院の範囲を明らかにするために寺院址西側の区画が発掘されたが、大壁によって寺院とは区切られていることがわかり、1993年には寺院の再調査と東側に長くトレンチを設けて範囲の確認に着手したが、僧房らしき小部屋が存在がみとめられたところで調査期限が切れてしまった。何らかの形で今後も調査が継続されることが期待される。

## 文 献

- 加藤九祚『中央アジア遺跡の旅』NHK ブックス334, 1979年。  
 加藤九祚「ダルヴェルジン・テベ都城址の二つの仏教寺院」『アジア諸民族の歴史と文化：白鳥芳郎教授古稀記念論叢』六興出版, 1990年, 187–204頁。  
 小山 満「ダルヴェルジン・テベ仏教遺跡の相当年代」『創大アジア研究』14, 1993年, 41–55頁。  
 『シルクロードの遺宝：古代・中世の東西文化交流』日本経済新聞社, 1985年。  
 『シルクロード・オアシスと草原の道』なら・シルクロード博協会, 1988年。  
 『南ウズベキスタンの遺宝』ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所, 創価大学, 1991年。  
 Pougatchenkova, G. *Les trésors de Dalverzine-tépé*. Éditions d'art Aurore, Leningrad, 1978.  
 Пугаченкова Г.А. Новое в изучении Дальверзинтепе (Дальверзинтепе調査の新発見). *Советская археология*, 1971, No. 4, сс.186–203.  
 Пугаченкова Г.А. Керамические печи эпохи Кушан в Южном Узбекистане (南ウズベキスタンのクシャン時

代の窯). *Советская археология*, 1973, No. 2, сс.205–215.

Пугаченкова Г.А. Терракотовая печать из Дальверзин-тепе (ダルヴェルジン・テベ出土土製印章). *История и археология Средней Азии*. Ашхабад, 1978, сс.82–88.

Пугаченкова Г.А. Храм бактрийской богини на Дальверзин-тепе (ダルヴェルジン・テベのバクトリア女神の神殿). *Древний Восток и мировая культура*. Москва, 1981, сс.112–117.

Пугаченкова Г.А., Ртвеладзе Э.В. Дальверзинтепе: Кушанский город на юге Узбекистана (ダルヴェルジンテпе: Узбекистан南部のクشان時代の都市). Ташкент, 1978.

Пугаченкова Г.А., Тургунов Б.А. Исследование Дальверзин-тепе в 1972 г. (1972年ダルヴェルジン・テベの調査). *Древняя Бактрия*. Ленинград, 1974, сс.58–73.

Пугаченкова Г.А., Тургунов Б.А. Новый буддийский памятник в Южном Узбекистане (南ウズベキスタン新発見の仏教遺跡). *Памятник культуры. Новые открытия. Ежегодник 1988*. Москва, 1989, сс.519–530.

Тургунов Б.А. Раскопки второго буддийского храма на Дальверзинтепе (предварительное сообщение) (ダルヴェルジンテпе第二仏教寺院の発掘: 概報). *Античные и раннесредневековые древности Южного Узбекистана*. Ташкент, 1989, сс.81–95.

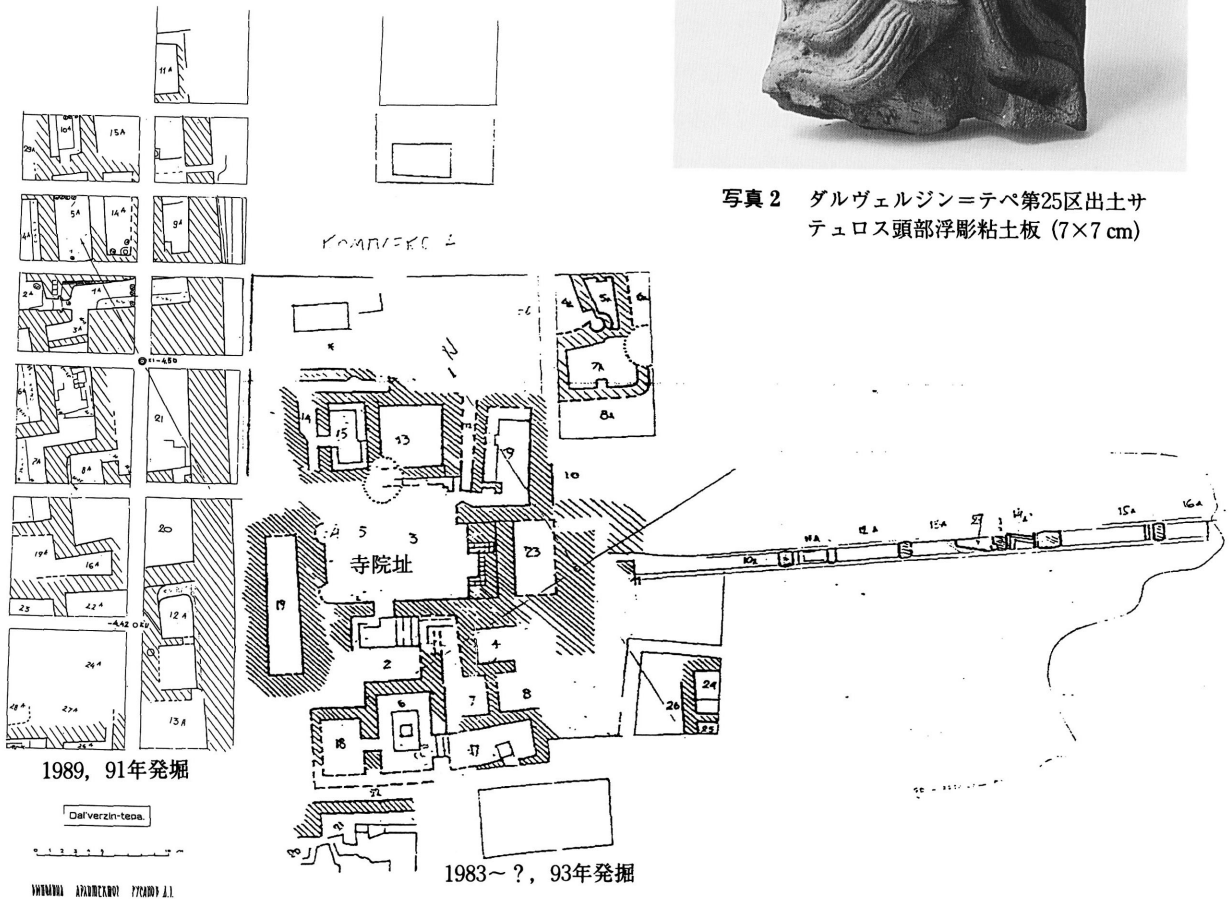


写真2 ダルヴェルジン=テベ第25区出土サ  
テュロス頭部浮彫粘土板 (7×7 cm)

図2 ダルヴェルジン=テベ ДТ-25